81

誌上発表

幕末期尾張藩における洋学普及への伊藤圭介の苦悩と貢献

山内　一信

東員病院・認知症疾患医療センター

幕末期江戸幕府は阿片戦争以後，外国からの脅威にさらされていた．この脅威に対して，外国の状況を詳しく研究し，対応策も考える必要があった．幕府施策の一つとして蕃書調所の設置（1856 年（安政 3））がある．蕃書調所は洋文・洋書の翻訳をはじめ，実用諸科学や殖産・工芸方面の研究や振興などを推進し，国防対策に役立てようとするものである．尾張藩でも重臣上田仲敏が中心となり，伊藤圭介とともに蘭学普及をはかった．上田没後，洋学所を受け継いだ伊藤圭介は藩内で国学派，洋学派の対立する中で，公的洋学所設置に努力した．その経緯について報告する．

伊藤圭介は植物学者，博物学者であり，蘭学者としても一流であり，尾張藩洋学普及への研究者，牽引者としても期待されていた．同藩洋学の普及は上田仲敏により始められ，自邸内の蘭学塾は，1848 年（嘉永元）頃には尾張藩から正式な允許を得ていたようである．1849 年徳川慶勝（当時義恕）が 14 代藩主に就任，慶勝はどちらかと言えば国学派が推す藩主であったが，知多半島の異国船防衛や砲術訓練に努めた．1858 年（安政 5）慶勝は日米通商条約に反対し，「急度御慎」となると，同年 7 月には異母兄弟の徳川茂徳が第 15 代藩主となった．茂徳はどちらかと言うと洋学派でこの治世時代には家老竹腰とともに幕府寄りの開港・西洋式軍制改革路線を進めた．

1859 年（安政 6），上田は銃陣師範役，圭介は藩の認可を受けた学問所としての洋学所総裁心得となり，田口俊平を教授に，服部元民，中野静載，佐竹徳照らを蘭学教員陣にすえ，教育体制の充実をはかり洋学発展への足場を固めた．当時，塾生一千人に及んだという．1860 年（万延元）桜田門外の変後，慶勝への「急度御慎」が解除された．1861 年（文久元），圭介は蕃書調所出役を命じられ，江戸に出て，洋学の知識を吸収，深めた．1863 年（文久 3）6 月上田が病没，同年 9 月，復権した慶勝の第三子徳川義宜が第 16 代藩主として就任するとその後見となり，慶勝の勢力が強くなり，家老成瀬は西洋砲を廃止し，国学派が勢いづいた．同年圭介は病気を理由に蕃書調所を退出，尾張に帰った．

1864 年（元治元）慶勝は第一次征長総督として出陣，圭介も寄合医師として従軍した．上田が居なくなった状況で，洋学所の教員人事は困難を極め，洋学所を自宅に移すこととなった．ここで尾張藩重臣千村十郎右衛門を洋学所総裁に据えることを嘆願するも，認められなかった．1866 年（慶応 2）尾張藩重臣小笠原三右衛門，横井孫右衛門，佐枝新十郎が洋学所を尾張藩校の明倫堂に移すべきとの意見を唱えたが明倫堂督学の阿部八助に断られ，不運な状況が続いた．さらに同年 12 月茂徳は一橋家を継ぐこととなり，尾張藩佐幕派は完全に孤立，大政奉還，王政復古とともに，圭介は洋学所の蔵書を藩主に提出し，洋学所は事実上消滅することとなった．

1868 年（慶応 4）1 月 20 日洋学所発展に支援をしてくれた重臣の中には斬首されたり，処罰されるという青松葉事件が起こった．その翌日圭介は京都禁闕守衛にあたった藩主義宜に従い，医師としての役目を果たした．風雲急を告げる幕末期，圭介の心境はいかばかりであったかと思いやられる．同年 8 月 2 日の日記には「ki 後，断然決意，tisi（楽餘年）」とある（意味は帰後，断然決意，致仕，楽餘年）．

1869 年（明治 2）には圭介は自宅政事堂で洋学を講じた．明治 3 年には名古屋藩立洋学校が創立され，愛知一中の前身となると言う．洋学発展のみならず，種痘普及，博物学発展への貢献も大であったと思われるが明治 3 年の石井隆庵，中島三伯とともに名古屋大学の源流とされる仮病院，仮医学校へとつながる西洋医学講習所開設を名古屋藩に嘆願．緊迫した幕末期を乗り越え，明治 4 年明治新政府からの文部省出仕の招聘を受け，東京へと活躍の場所を移した．